

原 明美 (音楽評論家)
Akemi Hara

モーツァルト：幻想曲 ニ短調 K.397

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)が生きた古典派の時代は、鍵盤音楽に関して言えば、古典的なソナタの確立等と共に、楽器がチェンバロからフォルテピアノ(現代のピアノの前身)へと移行した時期でもある。モーツァルトにとって、当時クラヴィーアと総称されていた鍵盤楽器は、演奏はもちろん、作曲に際しても、幼いころから生涯にわたって最も親しんだ大切な楽器だった。

ニ短調の「幻想曲」は、1782年ごろにウィーンで作曲されたと考えられている。自筆譜は失われているが、実は未完の作品であり、初版譜では、曲が途中で終わっていた。その2年後、10小節が追加されて曲が完全終止する楽譜が出されたが、この追加部分を完成させたのは、当時の指揮者E.ミュラー(1767～1817)だったと伝えられている。曲は、3つの部分から成る自由な形式で書かれている。冒頭の、分散和音が続く幻想的なアンダンテの部分は、序奏部とみなすこともできよう。次のアダージョの部分は、ト短調のカデンツァ風の間奏部を伴っており、曲想は次第に、緊張感を増してゆく。その後、ニ長調に転じて、アレグレットの快活な楽想が展開し、追加されたコーダで閉じられる。

モーツァルト：ピアノ・ソナタ第3番 変ロ長調 K.281

モーツァルトのピアノ・ソナタは、短い生涯のうちに19曲ほど残されている。古典派のピアノ・ソナタの基本的な様式を確立し、そのなかに彼らしい明るく流麗な楽想が盛りこまれたこれらの作品は、ピアノ音楽史上、重要な位置を占めている。

今日あるモーツァルトのピアノ・ソナタの最初の6曲は、1774年12月から1775年3月にかけてのミュンヘン旅行のために、1774年にザルツブルクで、もしくは1775年にミュンヘンで、作曲されたと推定されている。そして、バイエルン選帝侯に仕えていた音楽愛好家のデュルニッツ男爵に献呈されたこの6曲のなかで、K.281は、華やかな演奏効果が特に注目されるソナタであり、3楽章から成る。

第1楽章 アレグロ。変ロ長調、ソナタ形式。

第2楽章 アンダンテ・アモローソ。変ホ長調、ソナタ形式。

第3楽章 ロンドー:アレグロ。変ロ長調、ロンド形式。

シューベルト：幻想曲「さすらい人」ハ長調 D.760 / Op.15

ウィーンで活躍したフランツ・ペーター・シューベルト(1797～1828)は、特に歌曲を発展させたことで名高いが、ピアノ曲にも、歌曲を想わせる旋律美があふれている。

シューベルトのピアノ曲のなかで、特に充実した傑作として名高いこの幻想曲は、第2楽章の主題に、彼の歌曲「さすらい人」の旋律が用いられたことから、「さすらい人幻想曲」と呼ばれる。

シューベルト自身が「幻想曲」と名づけたこの作品は、1822年に完成され、ピアニストのE.リーベンベルクに献呈された。そして、一定の主要動機によって統一されており、一種の循環形式によるとも考えられる4つの部分が切れ目なく続く単一楽章制でまとめられている。また、4つの部分を楽章とみなして、以下のように4楽章制のソナタと考えることもできる。

第1楽章 アレグロ・コン・フォーコ・マ・ノン・トロポ、ハ長調。自由なソナタ形式。

第2楽章 アダージョ、嬰ハ短調。歌曲「さすらい人」の旋律を主題とする変奏曲形式。

第3楽章 プレスト、変イ長調。速いテンポのスケルツォのスタイルで書かれている。

第4楽章 アレグロ、ハ長調。対位的な書法も交えて展開する、華麗なフィナーレ。

ベルク：ピアノ・ソナタ 口短調 Op.1

アルバン・ベルク(1885～1935)は、シェーンベルクおよびヴェーベルンと共に「新ウィーン楽派」と呼ばれる作曲家であり、彼が1907年から翌年にかけて作曲したピアノ・ソナタは、シェーンベルクのもとで作曲を学んでいた時期を締めくくる作品である。当初は多楽章制のソナタが計画されたが、ベルクは、第1楽章を書きあげた時点で、完結した作品とした。この単一楽章のソナタは、古典的なソナタ形式で書かれている。調号は口短調、つまり、今回のプログラムで次に演奏されるリスト作品と同じだが、その響きは調を超えて拡大され、そして、増音程を含む3音から成る冒頭の上声部の動機が、曲全体に対して機能している。

リスト：ピアノ・ソナタ 口短調 S.178

ハンガリーのライディング(現在はオーストリア領)に生まれたフランツ・リスト(1811～86)は、ヨーロッパ各地で名ピアニストとして活躍し、音楽史上最も優れたピアニストの一人だった。作曲家としては、特にピアノ曲において、自身の卓越した演奏技巧を生かした華やかな作品の数々を残している。

リストは、ピアノ独奏曲だけでも数百曲を書き残したとされる。その代表的な傑作の一つに挙げられる口短調のピアノ・ソナタは、1852年から翌年にかけての間に、ドイツのヴァイマル郊外で作曲された。ローベルト・シューマンから献呈された「幻想曲」への返礼として、シューマンに捧げられ、1857年にハンス・フォン・ビューローによって、ベルリンで初演されている。なお、この作品は、従来のピアノ・ソナタの概念からは、かけ離れた内容を持っていたため、初演当時、批評家のエドゥアルト・ハンスリックから酷評されたが、一方でリヒャルト・ワーグナーらによって高く評価され、この二派の争いが表面化する結果を招いたと伝えられている。

曲は、当時のピアノ・ソナタの概念を超越して、長大な単一楽章で書かれているが、変則的ながらもソナタ形式を保っている。つまり、それぞれに大きな規模を持つ提示部、展開部、再現部に相当する3つの部分に分けられる。さらに、そのなかには、緩徐楽章や終楽章を思わせる場面もあり、この点からは、3楽章制のソナタが一つの楽章に凝縮されていると、みなすこともできよう。このように緊密な構成によりながら、高度な技巧や豊かな幻想性に彩られ、また、雄大なロマンティズムにあふれたこのソナタは、まさに、リストというピアノの名手の個性が盛り込まれた傑作である。